

寸庭の心——武蔵の歌とモズの絵の秘伝

京庭司 小野 陽太郎

乾坤をそのまま庭と見るときは

私は天地の外にこそ住め

宮本武蔵が四百年も前に詠んだ和歌である。天地即ち地球を庭と見るには宇宙から見よと云う。つまり庭は居乍らにして天地の外に住まいさすと云うのだ。この歌は作庭の極意である。

武蔵が庭作りが好きだった事はあまり知られていない。

徳川家康の家来が実際に武蔵と会い、風貌や人柄を語っている「渡辺幸庵対話」という書物には、庭作りは大変面白く石を動かすことにより天地が出来るかと武蔵が語ったとある。

武蔵の六十数回の決闘は佐々木小次郎との試合が最後で、その後は詩歌、茶道、絵画などを独学している。

四十才の頃には寺院の庭や、明石城の中に植木屋敷と云う庭園を作ったり、城下の都市計画まで手懸けている。庭作りをしながら剣の工夫をし、また剣の理をもって作庭を試みたという。

絵画は江戸初期の有名な画家と比べても評価は高い。重要文化財の武蔵の絵四点は全て鳥の絵である。鳥の好きな武蔵。「乾坤の歌」も有名なモズの絵「枯木鳴鴉図」からも武蔵の鳥瞰的な感性が読み取れる。鳥は

空から広い地上を見渡し、小さな木の実や虫も見つける。この鳥の鋭敏な性質が好きなのである。

武蔵が晩年に著した「五輪書」の冒頭には、兵法を学ぶ者の心掛けとして大切な要点があげられている。

目に見えない所を悟りて知る事。わずかな事にも気をつける事。

この教えは武蔵独特のもので、心の目は肉眼で見えない物が観えると云っている。目に見えぬ物を映し出す心の鏡を磨かねばならないと説く。何事にもあてはまる教えである。

「枯木鳴鴉図」には鴉の止まっている枯木の中に虫が描かれている



が、武蔵は何故虫を描いたのか？あまりこの事は論議されていない。心掛けの二ヶ条を念頭にこの事を考えてみたい。

鴉、虫、木の生死を武蔵は問うている。虫が木の葉を食べ枯らしたと見る。次に鴉が虫を食べて殺すのかとよく見ると、鴉の目は虫よりも川底を見ている。武蔵は鴉をどう行動させるか？五輪書にこれを解く鍵がある。絵の中の地水火風即ち五輪を

探す。背景の空。風に揺れる葉。水面。

木の根元には地面があるはず。火が見当たらない。火は五輪書「火の巻」の事で作戦。鴉が虫を脅して落とす。

その虫を川底から魚が出てきて食べようとす。その時に、鴉は魚を捕える作戦で魚を狙っている目付きである。武蔵は生死をじっと見つめている。では、鴉はどうして殺されるか。鴉の天敵カッコウに子供を殺される。孤高に天を指し朽ちて行く枯

木。秋風に吹かれる若木にはこの時期に有るべき実が無い。新たな命の実だ。武蔵は五輪書に兵法の実を解き明かすと述べている。つまり、描かれていない実を心の眼で発見させる為のヒントに虫を描いたのである。見えない所を悟りて知ると

云う心の大事と、大自然の無常と循環という真理を、この一幅の絵で示した武蔵の工夫は誠に素晴らしい。寸庭の心は武蔵の「乾坤の歌」と「枯木鳴鴉図」の教えの中にある。

京庭師 おの ようたろう

1943年生。寸庭作家として伝統を生かした庭の創作活動を続けている。
また作州(岡山)に伝承される竹内流古武道の師範として聴風館道場(北区)で多数の門人を指導。京都造形芸術大学客員教授